

# 『万葉集』とは何か

# 『万葉集』注釈の目的

現存する『万葉集』は、二十巻、四千五百余首を取める。その原核は原万葉と呼ばれる巻一・巻二の歌群に始まり、そこに個人歌集や個人歌集の歌々を加えられ、やがて大伴家持の手によって全体がまとめられた。

原型である巻一・巻二では、雑歌・相聞歌・挽歌の三つに歌が分類される。雑歌は祭祀・儀礼歌、相聞歌は恋歌、挽歌は死者哀悼の歌である。この三つに分類する意識の根底には、人間が根源的に希求する祈りが見えてくる。生きることに生き抜くことのために神に祈り、人としてあることのために愛する人や家族との人間関係を求め、死と滅亡を恐れるために生の永続を希求することである。歌は、そういった人々の祈りの感情によって生まれるものであり、そうした祈りの歌によって『万葉集』は作り上げられていった。

いかなる古典も、歴史的な注釈によって読まれるのを基本とする。中国の古典には伝、箋・注、疏、正義などの様々な注釈のシステムが存在し、それらの注釈も時代に沿って様々に展開している。日本においても注釈の歴史は古く、日本人が古典の注釈に深く向き合っているのは、律令時代の学生たちであった。学令においては漢籍は、学生たちが習すべき必修の儒教テキストであり、これらテキストを注釈書によって教授せよという規定があった。これらは儒学の主要な教科書であり、古代日本の学問は儒学の特化することによって形成されたことが知られる。

て日本の学僧による日本古典の注釈へと向かい、『万葉集』は注釈の対象に値する重要な古典となった。

中国古典の訓詁・注釈が儒学理解のためにあるとすれば、詩の古典である『詩経』も、この訓詁・注釈によって儒教的テキストとして読まれた。古く旧約聖書の読みも必然的に訓詁・注釈の学が方法化され、文献学に裏付けされた訓詁や注釈が何百年にもわたって積み重ねられた。ひたすら、神の真理を理解するためののである。それは、釈迦が没して五百年後の仏典の結集も同じであった。

一方、日本における『万葉集』を国風の古典として読もうとする試みは、古典に対する理解が成熟したことを示している。しかも、『万葉集』というテキストの訓詁・注釈は、儒学のためでも、宗教的真理追究のためでもない。その意味から言えば『万葉集』が古典として訓詁・注釈の対象となったのは、漢籍に対して日本古典もその対象となることへの発見から始まった。詩作のための漢籍の訓詁・注釈は、『万葉集』にも適応し得たのである。同時に、その出発が国風への関心であったことにより、江戸期には国学という学問の形成にも『万葉集』が大きな役割を果たした。

発する(『万葉代匠記』初稿本)。以後、国学による多くの注釈が生まれる。

『万葉集』の注釈史は、大きく二つにまとめると、Aは平安以降に興った訓詁・注釈を主とする本文に即した文献的な読み、Bは江戸国学や明治以降の和歌や短歌への理解に興った、様々な人々に開かれた古典としての読みとすることになる。そうした中で契沖の『万葉代匠記』は特異である。はじめに編まれた初稿本はBに拠るが、後の精撰本では、Aの備仏に渉る文献学的手法が駆使されている。精撰本は、本文の正確な読みを試み、更には「此集ノ歌ヲ心得ムニハ、イトキナキ子ノ片言スルヲ、母ノ聞キナレテ意得ル如クスベシ」(『万葉代匠記』精撰本)とも言い、A Bどちらの流れをも汲むこととなる。

こうした『万葉集』の注釈史から次に求められるのは、『万葉集』という日本古典文学が東アジア文学史や世界文学史に参画するための注釈の準備であるように思われる。それは、契沖のようなA Bどちらをも視野に入れた注釈である。

本書は、東アジア文学史に参画するための注釈として世に問うものである。

また、古く日本列島に歌われていた歌は、いわゆる(和歌)ではなかった。それらは無文字社会において長く伝えられていた(ウタ)であった。しかし、『万葉集』の時代に、倭のウタが漢詩(カラのウタ)と向き合うことで(倭歌)または(和歌)への意識が成立していく。この時代は、歌の発生から完成へと至る歴史であり、また歌う歌から書く歌へと至る歴史であり、さらに伝承歌の時代から歌人の時代へと至る歴史でもあった。『万葉集』を知ることは、日本文学史の上で極めてダイナミックな展開を示した歴史を知ることとなるのである。

奈良時代には律令下の注釈理解によりテキストを分析する知識人たちが台頭し注釈学へと展開する。『万葉集』の中にあつては、山上憶良の「類聚歌林」という歌集が存在したらしく、巻一・巻二に資料として断片的に引用される。「類聚歌林」自体は亡失しているため全容は不明であるが、その歌にどのような歴史的状况が存在したかを解説しており、そこには一種の注釈的態度が認められる。さらに憶良の「沈痾自哀文」(巻五)などの漢文文章の中にも自注が付されている。

平安時代に至ると、『万葉集』訓詁が勅撰和歌集編纂を行った源順ら梨壺の学者たちにより始まる。それが『万葉集』であったのは、国風への強い関心からであった。さらに、鎌倉時代に学問は寺院において広く展開し、日本五山の登場はそれを積極的に促した。詩作に根ざした漢詩・漢文の注釈学から、やが

『万葉集』と国学

国学は、賀茂真淵や本居宣長に代表されるように、漢籍とは異なる価値体系を持つた古典としての古学・古道の追究へと邁進する。そこに連なる多くの国学者は、歌を詠むことで古えに近づこうとし、それゆえに『万葉集』は古学としてのテキストとして読まれた。徳川光圀から『万葉集』の注釈を依頼され、漢籍・仏典を駆使して文献学的に『万葉集』を解き明かした僧契沖も、最初は国学的態度から出

こうした『万葉集』の注釈史から次に求められるのは、『万葉集』という日本古典文学が東アジア文学史や世界文学史に参画するための注釈の準備であるように思われる。それは、契沖のようなA Bどちらをも視野に入れた注釈である。

本書は、東アジア文学史に参画するための注釈として世に問うものである。

萬葉集正義 (全 10 冊) ★定期予約・分売予約受付中!

## 2024年8月刊行開始

A5判・上製・函入・平均600頁(予定) 6か月毎に配本

- 第1回配本 [2024年8月] 定價八、八〇〇円(税込)  
第1〔収録〕：巻一・一〕 ISBN978-4-8406-251-1
- 第2回配本 [2025年2月] 予価一〇、四五〇円(税込)  
第2〔収録〕：巻三・四〕 ISBN978-4-8406-251-2
- 第3回配本 [2025年8月] 予価九、三五〇円(税込)  
第3〔収録〕：巻五・六〕 ISBN978-4-8406-251-3
- 第4回配本 [2026年2月] 予価一〇、四五〇円(税込)  
第4〔収録〕：巻七・八〕 ISBN978-4-8406-251-4
- 第5回配本 [2026年8月] 予価一〇、四五〇円(税込)  
第5〔収録〕：巻九・十〕 ISBN978-4-8406-251-5
- 第6回配本 [2027年2月] 予価一〇、〇〇〇円(税込)  
第6〔収録〕：巻十一・十二〕 ISBN978-4-8406-251-6
- 第7回配本 [2027年8月] 予価九、三五〇円(税込)  
第7〔収録〕：巻十三・十四〕 ISBN978-4-8406-251-7
- 第8回配本 [2028年2月] 予価九、三五〇円(税込)  
第8〔収録〕：巻十五・十六〕 ISBN978-4-8406-251-8
- 第9回配本 [2028年8月] 予価九、三五〇円(税込)  
第9〔収録〕：巻十七・十八〕 ISBN978-4-8406-251-9
- 第10回配本 [2029年2月] 予価一〇、四五〇円(税込)  
第10〔収録〕：巻十九・二十〕 ISBN978-4-8406-252-0
- 全冊セット 予価九九、〇〇〇円(税込)  
ISBN978-4-8406-251-0-4

### ① 各歌に詳細な語釈／成立論／内容紹介を付した『万葉集』全注釈の決定版

本シリーズでは『万葉集』全20巻を2巻ずつ、全10冊で徹底精読する。最善本である西本願寺本に則った最良の校訂本文・読み下し文を提供し、各歌に詳細な語釈を付す。各歌には「作品の成立」「作品の特質」などとして、上代文学研究の立場から精緻な作品解説を掲載している。

### ② 漢籍の出典などを重視した比較文学研究

語釈では漢籍の文言との関係を丁寧に考究している。これは『万葉集』を比較文学研究の立場から研究したという点で画期的。また、民俗学の立場からの解釈を試みている点も注目される。

【予約受付中】 刊行次第、お届けいたします。ご注文は下記にご記入の上、最寄りの書店か、または小社までお申し込み下さい。

申込書	國學院大學萬葉集正義編集委員会編／八木書店刊 2024年8月刊行開始 <b>萬葉集正義 全10冊</b> ( )セット ISBN978-4-8406-2510-4 セット予価 99,000円(本体90,000円+税)		取扱店(番線印)
	お名前(ふりがな)	TEL	
	ご住所 〒	FAX	
		E-MAIL	

八木書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8  
Tel:03-3291-2961/Fax:03-3291-6300 pub@books-yagi.co.jp https://catalogue.books-yagi.co.jp/

國學院大學 萬葉集正義編集委員会編

## 國學院大學創立140周年記念

# 萬葉集正義

全10冊

## 2024年8月刊行開始

定期／分売予約受付中

漢籍を中心に比較文学の知見を盛り込んだ

『万葉集』注釈の決定版!

八木書店



# 組見本

## 《訓読文・現代語訳・校訂本文》

訓読文・校訂本文は最善本である西本願寺本に則り、初学者にもわかりやすく現代語訳を付す。

1 天皇の蒲生野に遊獵したまひし時に、額田王の作れる歌  
20 茜草指す 紫野逝き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る

天皇が蒲生野に遊獵された時に、額田王が作った歌  
明るい日が照るように、照り輝く紫野を散歩し、また標の張ってある野を散歩していますのに、野守が見てい  
るではありませんか。あなたが頼りに袖を振るのを。

### 【校訂本文】

天皇遊獵蒲生野時、額田王作歌  
茜草指 武良前野逝 標野行 野守者不見哉 君之袖布流

### 【注釈】

○天皇 近江朝の天智天皇。既出一三番歌。○遊獵蒲生野 時 蒲生野は滋賀県の地。和漢音訳に「蒲生江州郡名」とある。近江鉄道八日市線市辺駅北方の船岡山一帯の野。現在この歌にちなんだ記念公園がある。「遊獵」は天皇の特  
別な儀礼。ここでは五月五日の中国風の薬氣。薬草を採取して邪氣を祓う行事。「芸文類聚」(巻第四)に「荆楚記曰。荆楚人。以五月五日並躡百草。採艾以為人。懸門戸上。以禳毒氣」とある。「獨」は既出三番歌。○額田王作歌 額田王は既出七番歌。○茜草指(茜草指す) 茜色の

ように明るい日が照ることから、次の「紫」を導く修飾語(枕詞)。「茜」は康熙字典に「本草。今染絳茜草也。史記貨殖伝註。其花染絳赤黄也」とある。倭名抄(卷十四)に「西兼名苑注云西蘇見反和名阿加弥可以染緋者也」とある。伊呂波字類抄に「茜アカネ西根阿景注云今染絳草也」とある。アカネ科の蔓性植物。根から染料を取る。それが日の輝きのように見えることから。○武良前野逝(紫野逝き) 「武良前」は紫。紫の野を遊覽して行き来すること。紫草は夏に白い花を付け、紫根は漢方薬や紫色の材料。全国に栽培させて宮廷に貢上させていた。この行事が薬氣である

## 《注釈》

漢籍の出典などを重視し、比較文学の知見を盛り込んだ詳細な注釈を付す。

## 《作品の成立》

歌の内容を丁寧に読み解き、歌が詠まれた背景について『万葉集』の注釈史にも触れながら解説する。

ことから紫草が素材となるが、紫の色を主体とした表現である。「野」は古義に「奴」の假名であったが「能」となるのは奈良朝の季の頃と言う。○標野行(標野行き) 紫草の標野を行き来すること。「標」は康熙字典に「蒲生野天文調。高枝曰標」とある。高い枝が目印になることによる。広益玉篇に「標々」とある。「標野」は天皇が上りする御座地なので立ち入り禁止の標のある野。○野守者 不見哉(野守は見ずや) 「野守」は標野の番人。野守を天智天皇あるいは自らを指す番人とする説もある。「奴」は反語。○君之袖布流(君が袖振る) 袖を振るのは相手への愛情表現。男子からの挑発に恥じうろ心せう。

○作品の成立  
次の歌の左注によれば、天智七年(六六八)五月五日の端午の節に、天皇以下の宮廷人が蒲生野に集い、盛大な遊獵が行われたことが知られ、その時に、額田王が詠んだ歌である。端午の節は中国の端午(五月初の午の日)に発し、日本では皇極初に初見で、この折に薬氣が行われている。中国の端午の節には人々が集って野に出て薬氣を行ない、無病息災を願った。この歌は次の大海人皇子との問答巻1の歌であることから、かつての夫である皇子との隠れた恋の歌と説かれている。大海人皇子の妻でありながらも、天

智天皇に召されて後宮に入ったというのである。それを指極的に説いたのは、伴信友などの江戸時代の研究者たちであった。額田王が天智天皇に召された後も大海人皇子が「しめびしぬびに御ことかよはしからよはしなどしたまひける(長等の山風)」と言う。その結果として、兄と弟による争い(壬申の乱)が起きたのだというのであり、そこに額田王の悲劇を読み取ろうとした。そのように解釈される背景では、歌を歴史的に理解する立場が存在したからである。ここにはそうして理解を可能とする状況があり、それを秘伝として伝えようとする態度もある。しかし、それは正史ではなく外伝や外史としての理解であるように思われる。外伝とは歴史を言及しながら、正史に隠れた歴史の文脈を読んで作られた伝えであり、物語りとしての伝えである。また外史とは正史とは異なり個人が伝えた歴史である。額田王の歌に触れた読み手は、王の妙技の恋歌に心動かされたことにより、それを歴史化する態度の上から外伝や外史として伝えたのである。本来は、端午の薬氣の後の歌宴にあつて詠まれた歌掛けの歌である。

○作品の特質  
この薬氣は端午に行われる薬氣であり、宮廷を挙げての異国風な行事である。多くの宮人たちが入り乱れて楽しむ

## 《作品の特質》

《注釈》《作品の成立》を踏まえ、民俗学的な観点もくわえた歌の解釈を通じて、その特質を詳細に解説する。

盛大な宮廷行事であったから宮人たちの心は高揚し、宮廷春仕の緊張の解かされる一日であった。こうした遊樂の場は春の若葉摘みの行事のように、男女が恋歌を掛け合う歌壇(主要語彙解説)の「歌壇」(参照)の場へと移るのを常とする。この歌壇には天皇や皇弟あるいは諸王が楽しく見守り、あるいはその歌掛けに参加したことが想定されよう。そのような高揚感の中から、額田王の歌が詠まれた。『茜草指す紫野逝き標野行き』とは、紫草の野を行き来しつつ遊樂してはいる様子であり、しかもこれは標野であると言ふ。標野とは他から区別された立ち入り禁止の野であり、その野に入つて歌い手が散策をえているのである。しかも立ち入り禁止である標野を通して、もう一つの意味、すなわち自らも立ち入り禁止の女子であることを示唆している。その流れの中に、「野守は見ずや君が袖振る」が続くのである。野守は標野を管理する番人であり、歌い手はその番人に見つかるとを恐れている。もちろん、それは立ち入り禁止の野に立ち入りたことについては、あ

この歌い手が示唆している立ち入り禁止の女子とは、人妻である。それはみな女の周知の事実である。そのような女子に、あちらから男子が自分に袖を振っているのであるから、女は困惑することになる。その困惑する女を、額田王は演じているのである。もちろん、これは野の歌壇への掛け合いの歌であるから、それを聞かされた額田王は、この額田王の歌に対して誰どのように答えるのか、誰がこの立ち入り禁止の女に袖を振っているのか、そちらに大きな関心が向かうことになる。ここには立ち入り禁止の女に向かい、しきりに袖を振る男を作り上げて、その男からの答え待つという意図があり、明らかに額田王による男たちへの挑発の歌として仕掛けられたものである。歌壇には社会性を持つ男女が登場するのではなく、あくまでも「もう一人の私」によって展開する虚の世界であり、特に男女の恋歌の掛け合いは、そうした仮構の上に成り立っている。

## 発刊の辞

國學院大學理事長 佐柳正三

令和四年十一月四日、学校法人國學院大學は、本学の母体であった皇典講究所が明治十五年に創立されてから百四十周年を迎えました。このたび、國學院大學創立百四十周年記念事業の一環として『万葉集』注釈である本書『萬葉集正義』が発刊されることは、令和への改元により、『万葉集』、延いては日本文化への関心がますます大きなものとなって

いる現在、洵に時宜に適切な企画であり、関係者各位のたいなる喜びであらうと信じます。

この創立百四十周年記念事業としては、令和四年四月に「觀光まちづくり学部」をたまたプラーザキャンパスに新設したほか、創立百三十周年からの十年間における法人の歩みを編集した「國學院大學百四十周年記念誌」の刊行、本学博物館において記念展示「近代工芸の精華―有栖川宮家・高松宮家の名品と金子皓彦コレクション」を開催しました。また、渋谷キャンパスの神域に明治神宮から寄贈された神殿を改装装飾して造営するとともに、昭和五年五月に御鎮座した現在の神殿をたまたプラーザキャンパスに移築して改装を行う神殿造替および境内整備事業等も進めて

おります。

さらに、来る創立百五十周年に向け、これまでの中長期計画を継承した、「伝統に立つ改革そして未来」へのスローガンの下に「中期5カ年計画」を公表し、法人の目的を「法人組織を強化するとともに絶えず変化する環境に対応可能な人材を積極的に養成し、以て社会に貢献する学校法人を目指すこと」と定め、この達成に向けて「教育研究の推進」と「絆と誇りの涵養」を二つの柱として位置づけ、

計画を推進しております。かつて皇典講究所開校式において初代総裁有栖川宮職仁親王から賜り、本学の建学の精神を示している「告諭」は、「今日以後職員生徒此ノ意ヲ體シヨ」という言葉で結ばれています。この「告諭」の指針を忘れず一致団結し、役教職員一体となって「オール國學院」のもとに、歴史と伝統を踏まえた新しい國學院大學を目指して、さらなる取り組みに挑んでいきたいと思っております。

國學院大學は古典を中核とする特色ある研究を進めてきた大学であり、古典を通して日本の伝統や文化を理解することを目的として様々な取り組みを行っております。そのなかには平成五年、横浜たまプラーザキャンパスにおいて、故櫻井満博士の御指導の下で教職員有志が約百五十種の『万葉集』ゆかりの植物を持ち寄り、植栽して開設した「万葉の小径」、そしてそれをきっかけに設立された公開講座「万葉の花の会」があります。本講座は、植物を通して『万葉集』に親しみ、『万葉集』を通して日本の自然や文化を理解することを目的に、広く一般の方々に年一回開催されています。この「万葉の花の会」の現会長は、本学名誉教授の辰巳正明先生に務めていただいております。このような縁もあつて、辰巳正明先生には本書の編集委員長をお務めいただくこととなりました。

最後に、本書刊行にあつて、『万葉集』の最善本である西本願寺本を快く提供いただいた一般財団法人石川武美記念図書館、また本書の出版を引き受けてくださった株式会社八木書店出版部に心からの感謝を捧げるとともに、いつも学校法人國學院大學の活動に対して御指導・御支援を頂戴している関係各位の皆様にも、今後ともより一層の御理解と御協力を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

國學院大學學長 針本正行

今般、國學院大學創立百四十周年記念事業の一つとして、『萬葉集正義』が刊行されることとなった。本書の刊行は、近世に勃興した「国学」に由来する國學院大學の特色ある研究を踏まえたものであり、今後の古典研究の歴史にとつても、意義ある足跡を遺すこととなったといえよう。

國學院大學は創立当初より、建学の精神を「神道」に、学問の基礎を「国学」に求めてきた。これは本学の「寄附行為」に、「古典を講じ神道を究め汎く人文に関する諸学の理論及び応用を研究教授し、以て有用な人材を育成し文化の進展に寄与する」とあることから明らかである。即ち、本学は「古典」の研究を通して「神道精神」を体現し、「国学」に精通する人材育成に一貫して取り組み続けてきた、世界的にも希有な大学なのである。改めて言うまでもなく、「国学」と「万葉集」には深い関わりが存在する。「国学」の鼻祖ともいえるべき契沖は、徳川光圀の依頼によつて『万葉代匠記』を著し、文献による実証主義に基づいた古典注釈史に画期をもたらした。この契沖の研究は、荷田春満に継承された。また、春満やその甥である荷田在満に学んだ賀茂真淵は『万葉新探百首解』冠辞考『万葉考』といった『万葉集』注釈を著した。そして、真淵は万葉調の歌を作ることを弟子に勧め、多くの学問展開を生んでいった。真淵の門人の中には、高名な本居宣長や『万葉集略解』を著した橋千藤がいた。その後には、鹿持雅澄が春満からの学統を受けながら、学説を集大成し『万葉集古義』を著している。右のような近世の「国学」による『万葉集』研究を継承したが、皇典講究所・國學院大學であった。皇典講究所では明治十五年

の創立当初から真淵や本居大平の『万葉集』に関する著作が講義されており、明治二十三年に國學院が設置されると、厳密な本文批判や訓釈の考究を行ったことで、明治期の『万葉集』研究を牽引した木村正祥が講義を行っていた。この木村の研究態度・方法は、大正元年から國學院大學の『万葉集』講座を担当することとなる佐佐木信綱へ受け継がれ、『校本万葉集』へと結実していくこととなった。『校本万葉集』の作成に従事したのが本学出身の武田祐吉であり、國學院大學における『万葉集』研究の先達となる。武田は、『校本万葉集』の校訂作業で培われた厳密な文献学的方法を土台として考究を進め、上代文学研究の発展に貢献した。戦後には『万葉集全註釈』を刊行した。一方で武田の研究と双璧をなすのが同じ本学出身である折口信夫の研究であった。折口は、大正五年に『万葉集』初の口語訳「口訳万葉集」を出版し、柳田國男に師事して民俗学的な観点から研究を進めていくこととなったが、その成果は『古代研究』として大成する。このように武田祐吉の文献学的研究、折口信夫の民俗学的研究は、現在も國學院大學の研究者を中心に継承され、今日の『万葉集』研究の基盤の一つとなっているのである。

さて、本書『萬葉集正義』の特徴は、近世から現代に至る「国学」、あるいはこれまでの國學院大學において蓄積された特色ある研究を踏まえつつ、漢籍を中心に比較文学の知見を盛り込み、『万葉集』全二十巻を徹底精読して注釈を付したことであり、広く学界に裨益するものであると確信している。

最後に本書の刊行にあたり、辰巳正明名誉教授を中心とする『萬葉集正義』編集委員会の皆様には多大なる御協力を賜った。あらためて皆様のご尽力に深く感謝申し上げます。